

契沖が宣長にもたらしたインパクトとは

今日宣長の学問を論じる者で『排蘆小船』を無視する者はいない。この書は、後の歌論である『石上私淑言(いそのかみささめごと)』や源氏物語論である『紫文要領』へとつながる宣長の思想の原点を示した書であり、「やがて宣長の学問として大成するじつに多くのことが、すでにここに萌芽として出そろっている」(中公バックス『本居宣長』「解題」(萩原延寿)、1984年、中央公論社刊、p.68)といった評価が穏当であるばかりではなく、合理的に妥当する。新編全集『近世随想集』の「解題」「解説」における『排蘆小船』未熟論は歪曲的だと言わざるを得ない。

前稿では萩原の「処女作というのは、どうしてこう、そのひとのすべてを、いや、そのひとのよいところばかりみせてくれるのだろうか。」という言を引用したが、『排蘆小船』と言う書物は、宣長にとっての学問上の問題——歌学、「物のあはれ」論、「古道」論など——がすべて取り集められた状態で、つまり、相互につながった、未分化な状態で書かれているわけで、そのこと自体の価値が非常に大きいのである。そこを踏まえなければ、『排蘆小船』から見た契沖という論も前進できないわけだ。

以上のような青年宣長の「問題」を契沖の業績が惹起した、そのインパクトとはいかようなものであったのだろうか？

まずは、『排蘆小船』の構成に沿って述べよう。

宣長は、歴史的に「歌道」と「歌学」とを見通しながら、帰納的に「歌の本体」はいかにあるべきかを論証する。結論たる「歌の本体」論が作品の冒頭に置かれているのため、構成上は帰納法には見えないが、実は、まず結論を述べてから、「歌道」の歴史、「歌学」の歴史へと論を進め、最初の結論を根拠づけていくのである。この帰納法的な行き方は、終生、彼の知的な方法であったことを想起すべきであろう。宣長は『排蘆小船』の冒頭で

歌の本体、政治を助くるためにもあらず。身を修むるためにもあらず。ただ心に思ふ事をいふより外なし。(・・・)みなその人の心により出で来る歌によるべし。(新編全集『近世随想集』、p.245)

と断言しているのだが、この「みなその人の心により出で来る歌によるべし」という命題は、歴史的な地平を超えて成り立つ歌の本質的な価値を言ったものだ。歌の表現は、時代時代の「心」が変わるにしたがって変わるのだが、「心の思ふとほり真直に詠む」ということ、つまり、「今は今の心にて詠む」ということは、時代を超えた歌の「本体」、「本意」に至る道だと宣長は考えているわけで、

歌は神代よりして盛衰なし。ただ時々の人心に随ふなり。今も歌の本体を守るとならば、心の思ふとほり^{まっすぐ}真直に詠むべし。(・・・)今は今の心にて詠むがよきなり。今の歌は、歌の本意にあらずとて、古来質朴の体に、ありのままに詠まんとするは、かへつて歌の本意を失ふなり。(同前、p.254)

と述べるのである。歌は「時々の人心」にしたがって変わるが、「歌の本体」としての「心の思ふとほり真直に詠む」べきだという真理は変わらないという。これは、歴史を超えた普遍性は歴史的に見出されるものだという逆説でもある。あるいは、歴史における不連続が見出されて初めて、その不連続を超えて続いていく地平が見えてくるとも言い換え得る。『排蘆小船』の主題としての「歌の本体」とは、こうして歴史的な視野においてはじめて浮上し、見出されるものなのである。

ちなみに、宣長は、時代を超えた歌学の本質のことを「歌の本体」「歌の本然」「歌の本文」「歌の本意」などと様々に呼び変えている。

ここで、005 稿および 007 稿で引用した「ここに難波の契沖師は、はじめて一大明眼を開きて、此道の陰晦をなげき、古書によつて、近世の妄説をやふり、はしめて本来の面目をみつけたり」(p.401) という行文を想起していただきたい。実は、ここで言われている「本来の面目」もまた、上記の歌学の本質を言ったものであったことが分かるだろう。

これは、村岡典嗣、笹月清美、大久保正といった近代宣長研究の草創期の大家が、そろって引用する行文であるが、その少し前の箇所から読んでみると、宣長は、「逍遙院殿 (= 三条西実隆) の説」に代表される中世以来の堂上歌学と古今伝授の伝統を歌道を「陰晦」(暗く曇っていること) に導いた大元として批判し、契沖が「古事」にもとづいた解釈でその「妄説」を打破したと評価したことがはっきりとしてくる。

そのうえで宣長が「一大明眼」と述べた契沖の発明とはいかなるものであったのかということになるのであるが、まさに契沖が歌道の「本来の面目」——つまり、「心の思ふとほり真直に詠む」ということ——を発見したという文脈になっていることが分かる。その点では『排蘆小船』は「まさしく石上私淑言の初稿本といふべきもの」(佐佐木信綱、「排蘆小船と宣長の歌論」、『賀茂真淵と本居宣長』、広文堂書店、大正六年) と言ってさしつかえないのだが、宣長の構想していた「歌道」においては「歌」の本質は人のあるがままの「情」にあるとされ、そうした意味での「歌道」の再定礎は後の「もののはれ」の思想の原点をなすものであった。

つまり、「もののはれ」論は、中世の彼方にあった「情」のあるがままの言語表現として「歌」を見出すという歴史的な認識から生まれた思想なのである。

こうして見てくると、宣長の仕事の全体を呼ぶものとしての「古学」は、中世歌学が「陰晦」で蔽った「情」／「もののはれ」を契沖が打破したということに気づいたところに始まったということができるだろう。

宣長は、契沖に従って実証的な方法をとることによって初めて中世的観念論が断ち切れ、そこに、古書のテキストのあるがままの姿、「物のはれ」の表現としての「歌」、ひいては日本の「古道」が立ち現れてくる言っているのである。

これをフーコーの方法に従って翻訳するならば、中世的な「知」(エピステメー) に覆われてきた古代のテキストをその時代の言語に即して読み直すことによって、古代の「知」(エピステメー) が見えてきたということに他ならないわけであり、それこそ宣長が契沖から学んだ方法はエピステモロジー(認識論) であったということができる。また、それが契沖の解釈学の方法を支えている認識であるとも言えるのである。

そもそも、時代と時代の〈あいだ〉（＝エポック）を認識することこそ、歴史がみずからを表わす条件である。小林秀雄は一貫して歴史は、心情的な、主観的なものとして現われると主張しているが、そうではなく、歴史の方から主観が与えられるに過ぎない。歴史があるから主観が成り立つ。主観が最初にあるというのは思い込みである。（歴史を歪曲しすぎると人間の認識力は低下する。）

それはそれとして、ここで重要なのは、中世歌学の観念性（実体は「古今伝授」等による神秘化を通じてなされる権威の私物化）を打破するために有効な武器となったのが契沖の実証的方法だったという点である。言語の意味は、歴史的に規定されるわけで、契沖が端的に示したのはこのことだったし、宣長が終生金科玉条のごとくして従った原則がこれであった。したがって、テキストの意味を知るために有効なのはテキストおよび同時代の文献（「古書」）の語法だということになるわけである。

以上見てきたように、『排蘆小船』は、契沖の学問的方法について、それが中世歌学の観念性を打破したところに契沖の意義のあることを初めて定位したものである。フランス哲学（カンギレーム、バシユラル、フーコーの流れ）の理論を借りるならば、時代から時代への認識論的な切断を問題化し、契沖においてその切断がもたらされたと言っていることになる。このことは、契沖の解釈学の条件となっているので非常に重要である。

2020年3月26日 研究代表者 西澤 一光